

郡家の庄とは

郡の政治・支配の中心である郡家には、郡家には、郡司に任命された地元の豪族たちが政務をとる郡庁の他に、租税として徴収した米を保管しておく正倉(倉庫)、公務で伝馬を利用することが認められた使いの滞在・宿泊の館舎、彼らの食事の供給するための厨家などの多数の建物が中の庄にあったと考えられる。

昭和五十八年に発掘調査された中庄遺跡からは、九世紀の掘っ立て柱の建築物跡を検出し、当時の須恵器なども出土した。

地形を見ると、この地区は周辺よりも少々高い台地になっており、洪水の被害を受けにくい位置にあったことが検証された。

また、近くの寺井町から小松にかけて存在する高堂遺跡では、発掘調査の結果では、木簡や墨書土器が発見され、この周辺に寺院かそれに類する施設があったことがうかがわれる。

鎮護国家の思想と仏教が重視された当時は、郡家の周辺には寺院が置かれることが多かった。

このように、周辺の農村とは異なる景観を持つ郡家も、地方支配の転換によって全国的に衰退していったのであり、能美郡家も同様の道を歩んだものと思われる。

もともとこの地域は板津と称せられた折に、そのため二つの名前を持つ荘園で安楽寿院を本家、勸修寺の領地とする、二重の荘園であった。

白山の見える郡家の庄
の想像風景

